

令和7年度 第1回 教育課程編成委員会議事録

日時：令和7年9月26日（金）20：00～20：58

場所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：教育課程編成委員会5名：長尾 博，松本逸郎，小林小夜子，有福浩二、大坪 建

本校職員6名：淡野，章，山内，増本，福島，荒木

記録：荒木

1. 校長挨拶

（淡野校長）

- この春の入学状況は、思ったよりも厳しく、定員の約半数にとどまった。厳しい状況の要因として大きく3つの理由が考えられる。
 - ①PT・OTの領域で、高校の先生方が大学進学を勧めるようになったこと。
 - ②長崎県内での就職状況が良好で、給与も良い企業が多く、進学を迷っていた層の一部が就職選択していること。
 - ③少子化による全体数の減少。
- 入試の状況（令和7年度に向けた今年の入試）

総合型選抜（旧AO入試）を実施しており、対面で理学療法1名、今年度初めて実施したオンラインで作業療法2名、計3名が決定しているが、これは昨年の6名から半減している状況である。
- 今後の懸念として理学療法の定員充足が急に厳しくなったことが、一時的なものか継続的なものかを注視していく必要がある。

2. 出席者紹介（自己紹介）

3. 開会

（章）当委員会の第6条の規定により出席数を満たしているため、本委員会は適切に成立していることを報告。

4. 委員長選出

（章）委員長は淡野校長で進めさせていただく。

5. 前回会議後の報告

（福島）

- 仮進級制度の変更

従来、1年から2年進級時に未取得科目が5単位あっても仮進級を認めていたが、後期（年度末）に判定会議を実施した。2年生の学習に積極的かつ前向きに臨めるよう、夏の段階で判定会議を設け、一旦区切りをつけて合否を出すこととした。これにより、不合格だった学生は後期に再試を受けることになる。
- 実習期間の見直し

3年生の長期実習をゴールデンウィーク前からスタートさせた。理由としては2年生の3週間実習（9月～10月）と3年生の地域リハビリテーション実習（1週間）の期間が昨年度重複し、協力施設に迷惑をかけたため、重ならないよう時期を調整した。

6. 審議事項：「卒業試験及び国家試験の成績分析について」について

(福島) 会議資料に沿って説明と報告する。

<卒業試験の構成と学生の層別分析>

- 卒業試験(卒試)：例年、11月から国家試験受験の2週間前までにかけ、全5回実施している。
 - 第1回：過去10年間の国家試験問題から出題(2,000問)
 - 第2回、第4回、第5回：外部模擬試験を導入
 - 第3回：過去10年分の国試問題と過去の業者模試を参考にした問題を構成(難易度が上がる)
- 分析対象の層(過去2年分のデータ)
 - 青(卒試・国試ストレート合格)：卒試5回合計で6割を超え、国試も合格した層
 - 緑(卒試再試験・国試合格)：卒試で一度不合格になったが再試験で合格、国試も合格した層
 - オレンジ(卒試再試験・国試不合格)：卒試再試験で合格したが、国試は不合格だった層
- 第1回卒試(過去問10年分)の正答率分析：
 - 青：全体91%(専門93%、基礎89%)。この層は過去問を9割方理解している。
 - 緑：全体79%(専門84%、基礎75%)。8割に満たず「危ない」状況である。
 - オレンジ：全体70.7%(専門78%、基礎64%)。国試不合格となる層は、過去問を7割程度しか正答できないことが示された。
- 苦手領域：全ての学生層において基礎領域が非常に苦手である。特に解剖学、運動学、生理学(基礎領域50問中50問を占める)の正答率が著しく低い。

<記憶の定着と学習指導に関する分析>

- 第3回卒試(ミックス問題)の分析：第1回から約1ヶ月後に実施された第3回卒試では、即時記憶ではない定着度が現れた。
- 青層の国試問題正答率は91%から85%に低下したが、85%は「自分のものにできている」レベルと評価された。
- オレンジ層の国試問題正答率は71%から59%に大幅に低下した(変動率16.4%)。これは、この層が即時記憶に頼っていたことを示している。

<結論>

最初の段階で国家試験過去10年分の問題に対する必要性を伝え、やり込む術を教えることが重要である

【意見交換】

(有福) 卒業試験前に危機感を感じてもらえるような試験は今は実施していないのか。

(福島) 悪い成績に落ち込む学生がいるため数年前からやっていない。ある程度やり方を伝えてショートタスクで段階的に行い、自信をつけさせながら試験に向かわせている。

(松本) オレンジにいる学生たちは経過の中で入れ替わりはあるのか。

(福島) ほとんど同じメンバーが占めている。

(松本) 国家試験の過去問より模擬試験の難易度が高いのは当然であり、オレンジの群には国家試験問題を繰り返し行いやる気を高めていく必要がある。

(福島) 本校では国家試験対策としてグループワークで、1つの問題をみんなで取り上げて、知らないワ

ードがあればそれを調べて説明させてアウトプットさせる方法を行っている。しかしながら下位層で成績が伸びない理由として、文章問題の意味が分かってない面がある。そのためオレンジの学生には問題を読み解くとか理解をさせるっていうところから、別グループで行うことも少しずつ行っている。

(小林) 今の学生は、ゲームが好きで学生も多いので、国試に向けてゲーム感覚でできるようなソフトはないのか。

(福島) スマホでアプリのようにできるものもあるし、出題された 10 問に答えたら「正答率何%ですよ」みたいに表示されるようなものあり、それは実際使っている。

(長尾) 2,000 問ある過去問を、よく出る問題に絞って（例：500 問程度に）学習させる方が現実的ではないか。

(福島) 学校側はすでに絞られたテキストを使用しているが、今後、学習範囲については検討していきたい。

7. 総評

(淡野校長) 学生の学力低下は深刻であり、入り口の時点で学力が低い学生を 3 年間で国家試験合格レベルまで引き上げるのは限界を超えている。学校としては可能な限り卒業させ受験させる方針だが、合格率を維持するために、教員は引き続き分析とトライアルを続けていきたい。

8. 閉会

次回は令和 8 年 3 月 27 日（金）20 時から

9. 謝辞